

平  
和  
へ  
の  
願  
い

## 私の戦争体験から

奥 西 三 雄 (七二)

一、平和都市宣言をされたことに感謝し、立派に純なる心で推進されることを望みます。三十年前広島の被爆地より瓦その他の遺品を戴き、草内より生産の茶を贈って味わってもらい、以後交流を深めた。「本当」の「平和」を心より願う人々のわずかずつの拠出により、役場の玄関と草内小学校の前に平和の塔「碑」を建立し、中に遺品を収め今日後輩が心温く引継いで大切に戴いている。ありがたく嬉しき次第です。何時までもお願いします。

二、今の「平和」「ヘイワ」を専売特許か雨後の筍の

ように政党や集会で言葉や「字」にて人々をあぶるごと、騒ぐことが平和愛好者のようですが……本当の平和を愛好し、願う人々は各々の職務を完遂し、日常道徳常識を重んじ、人々と笑顔で接しておられる方々が平和実務者だと思う。「平和」の字をもてあそんだり「ヘイワ」の言葉をエサにされてはホトホト困ると思うのは私一人でなからうと思う。「平和」「国利益」「戦争反対」を叫べば、また看板にすれば知識人文化人だろうか。第二次大戦終結後、多数の国家が独立し「平和」が合言葉である筈が、百四十回もの民族闘争や国境紛争、同国民殺戮が発生し、その終息？ 国の組織美麗言の何々主義、何々政策の恐しさ、身をもって味うべきだと思う。

三、旧軍のこと、戦中のこと、酷評したり悪く書く、と人々にうわさされ、偉い人だ良い方だと褒めて戴く、それほど、旧軍は不徳の根源で、悪の温床だったのか。私は十四年に習志野騎兵学校に入った。北の端、南の淵の全国一道三府四十三県四百四名が「貴様」「俺」の

同期生で、多田区隊長（陸大四国師参謀）より「身を持するに厳なれ、ことをところするに公正たれ」と、朝に教えられ、夕に鍛へられた。隣の救仁郷（陸大自衛隊福岡師団長）川口正義（陸大京都師参謀）も厳しく又温情溢るる人だった。田辺の里は朝日が東の山より昇り、黎明あつて朝となり、甘南備山の遙か西に沈んで夕暮れの楽しい時刻だ。習志野下志津原（成田空港含む）では太陽が遙か東の原の端から顔を出すのと同時に朝である。夕日が西の草原に沈むと同時に夜となり、夕暮の楽しい時間少く、闇となる西北に霊峰富士を拝し、北に筑波山を遠眺するが、自然変化少く子供の時、地理で習ったり本で読んだり、人から聞いたことが……。日本にも広いところがあるな—と思った。旧軍は「女」「子供」を守り、「年寄」を助け、「国」を護るを信条とし己の犠牲を顧みず、人様に盡すと心身を修練に明け暮れたものだ。

④ 過ぐる年ロスアンジェルスオリンピックにて当時の西中尉が障碍で優勝した「ウラヌス」号が余生楽し

み、毎日の馬運動だったが突然馬令二十歳で倒れた。西戦車連隊長が戦死される一か月前だった。アア人馬の念も通じるか。

⑤ しばらくの間、殿下侍従武官と一緒だったが、彼の方々の身の在り方、ことのところ理方、その言動には、ほとほと感じ入った。戦術講義等の時は椅子に座ると、一時間でも微動だにしない。現地戦術や実兵指揮等々にて、疲労困憊に達しても座して討論され、草原に裸になって寝転んだ私どもと、あんな生活では、一か月も命がもたんな—と今は極端な賛美や余分の崇拜は可としないだろうが、人間修養は立派で最もたるもの十七年献上の桃を仮住居に届けた折、「白衣服ヲ着シタ美麗ナ女官」が白い飲みものをくださった。連れの二人に奨めつつ、口に運んだところ、山羊の乳だった。乳類は特別嫌だった女官の前で吐き出せず咽喉に入らず、汗タラタラで苦しみ二人に助けられ恥かしい謹慎だ。以後牛乳を嗜み、老後の栄養補給源だ。

⑥ 二十年八月、大本営より某國の参戦を聞いて啞然

とした。條約協定等々は紙一枚か相手を甘く見たにもほどがある。その後数十万人を連行し、塗炭の苦しみと酷使にて数万の命を無くした事実、国際協定も人道も無いのか……。今日良い話や甘言があつても、霊と同志の心を肝に銘じて、将来に禍根を残さざる処置をして欲しい。東南アジア、南方に手を握る国々がないのかな—。郷土部隊参戦の「バタアン半島」死の行軍と意味が違ふ。二万前後との情報、諜報が数万の捕虜実数現地に食糧、宿舍なく輸送機関ゼロの当時、万策盡きて部隊長決心を問われ「処置なし」であつたが、責任者や関係者は戦犯死刑、刑期何年、勝者勝手敗者無念御冥福祈る。

⑦ 我が家でも近隣親戚でも難しいことをいえば「お爺さん時代が違う」と時移り年表変わつても「道徳」「人道」「常識」変らずだ。

（草内在住）

## 世界の平和を願って

本元文雄(七)

終戦後四十数年経過しました。その後の日本、戦争に負けたとはいえ、順調に復興の一途をたどり、建国以来味わったことのない平和な暮らしを味わっており、ますます。ややもすれば戦争の恐ろしさを忘れ勝ちになり、我々国民は今や改めて戦争と平和を考えさせられる時でもあると思います。戦後四十数年にわたり、戦争の悲惨さや傷跡については多くのことが語られて来ましたが、しかしどんなに語り継がれて発掘されたとしても充分にはほど遠く、これまで知られなかった事実が今なお明らかにされています。そして同じ体験でも人それぞれ

れに違う意味の重みを持って語られて来ました。しかし我々戦前戦後を体験した者にとって、次世代に戦争の悲惨さを語りたい気持ち一杯ですが、戦争体験を持たない二十代三十代世代の人たちには平和の現代ではピンとこない話であり、戦争中の苦労話は沢山ありますが、身近な孫達には時折り話しかけたりして食糧の不足、マラリヤや疫病、そして敵の攻撃など、戦争の悲惨さは脳裏を離れませんので、日々の生活の有難さと共に食べ物の大切さを味わってきた者にとっては一粒の米も大切にしよう語っております。そして終戦を遙か印度洋ニコバル島で知り、武装解除されて毎日暑い酷暑の中、赤鬼のような外国人に、ハンマーを振り廻されての重労働と食糧不足による食べられる野生植物の採取など、生と死の境を体験をした者にとっては、戦争は二度と味わいたくない思いで一杯です。

今現在、世界のどこかでは何かの争いが起きていますが、我々日本人は世界は一つの信念の下で世界の人々と仲良く平和を願う次世代には二度と戦争を起さない

ことを語り継いで行くのが我々戦中戦後を生きて来た者の責務と考えて世界中が永久に平和が続きますよう祈りたい心で一杯です。

(宮津在住)

## 記憶の中に平和を求めて

齋藤 絹代 (五)

今や企業戦争、軍備戦争、地域紛争など、私達の周囲では絶え間無く争いが続出。本来人間は、平和を切望しながら、いつの時代も泥仕合に縁が切れません。住み良い地球をと大きくスローガンを掲げながらも、環境汚染や自然の破壊に關与し、全く矛盾している現状にあります。パスカルは「人間は考える葦である」といいましたが、一人一人が問われ、自覚、自重する時を迎えているのでありませんか。

日本は今から四十六年前、あのいまわしい戦争にピリオドを打ちました。当時私は四歳でしたが、終戦後

がなければ話せなかったのでしょうか。それにひきかえ母は幼児を抱えての苦しかった内地の出来ごと、田舎のないものの惨めさ、耳にタコが出来るほど聞かされました。当時母は病弱で、乳児の弟と幼い私を連れ夫を戦地に送り、不安な日々の連続で幾度も生死の危機に遭遇し生きているのが、不思議なくらいです。弟はいつも母の背に負われ、私の手をしっかりと握り、大空襲の火災の中を逃げ切り、時には機銃掃射を受けながら、ある時は敵機兵の顔が見えるような近距離からも全力で逃げたことを小さい私も憶えています。本当に怖かった。家の回りには大きな爆弾の池がたくさんありました。子供達はそこに石を投げて無心に遊んだものです。

そして私も五十路に入り戦争を語る人も少なくなり、私の記憶も徐々に薄れつつあります。しかしどうしても忘れてはいけないうこと、人と人との殺し合い、それは罪です。大罪です。どうか一人一人が識別の目を持ち、二度と誤まちをふみませんように。気の毒な多く

も長い間、工場より鳴り響くサイレンの音に体をびくびくさせ怯えた日のことを忘れることが出来ません。あれからの八月十五日には毎年、終戦記念日の様々な行事が催されています。厚生省より政府広報として「全国戦没者追悼式」が挙行されると広く国民に知らされています。それに対して幾人の人が平和祈念のため、新たな誓いをしているのでしょうか。日本の復興は内外の多くの犠牲の上に築かれていることを忘れず、次の世代の人達に語り継ぐ責任を負って生きている。私自身戦時中母はいつもこう言っていました。「この子は機敏な賢い子だ。」それから戦後、世の中が落ちつくにつれ「この子はどういね、馬鹿ね。」とこれは私のことです。そして母の口癖でした。今考えると馬鹿に違いありませんが、たとえ幼児であっても生死をかけた厳しい時代、機敏でなければ生きられなかった環境が私の中にあったのでしょうか。

父は二十年前、五十七歳で亡くなりましたが、生前お酒を飲むと戦地の中国のことを話していました。酒

の犠牲者、中国孤児、従軍慰安婦、強制的に連れてこられた韓国の人達を忘れないで下さい。また今日では飢餓にあえいでいる世界の人のことも、飽食の時代に生きている日本人、手を差し伸べようではありませんか。

(大住在住)

## 永久に平和が続くことを願って

保田定男(六六)

昭和十二年に支那事変が始まり、翌十三年の二月四日、父に召集令状が来た。私が三山木尋常高等小学校六年生、弟が二年生の時であった。令状が来てからわずか四日間の慌しい出発であった。皆さんに送ってもらって元気に家を出ていった。残されたのは祖母と母の四人である。家は農業なので何とか耕作を続けて行かねばならない。祖母、母も一生懸命働いた。私も学校から帰えると茶園の草引、水田の除草と色々手伝った。牛も飼っていたので草も刈らねばならない。父のことも心配だし、淋しい。父一人が家にいないとこ

んなにも辛いものかと思った。幸い近所の人、消防団の人、小学校の同級生まで除草の手伝い等に来て下さった。子供ながらに人々の親切が身にしみて嬉しかった。

支那事変の始め頃なので、戦勝のちようちん行列等もあったが私は楽しくも、嬉しくもなかった。戦死の公報が入ったと聞かされるたびに、子供ながらに大人達はなぜこのような戦争をするのだろうかと思った。

幸い父は二年ほどで無事に帰って来た。しかし入替りに次々と多くの人が出征されるようになり、この方々が無事に帰ることが出来るのだろうかと心配であった。そのうちに大東亜戦争に突入、私の友達も早い人は自分から志願をして入隊された。この戦争が正しく、国のために戦うことが愛国心の強い国民だという教育をされて、私もその頃には、国のため皆んなのため、軍人にならなければならぬ。国のため、皆んなのためなら死ぬことが出来ると考えるようになった。

昭和十九年に徴兵検査を受けた。いつ入隊の通知が

来るかわからない、父も予備役なのでいつ召集令状が来るかわからない。父が軍隊にいる頃、お父さんの面会に息子さんが来られた。息子さんは将校さんで、お父さんが召集の兵隊さんだった。そのような方を知っているの、私の家も親子で入隊というようことになるかも知れないので、覚悟をしておいた方が良いといわれた。私は現役入隊したが、父は家に残れた。その間、色々と苦勞をしたが昭和二十年八月十五日、終戦をむかえた。

私達は何のために生命を賭けて戦争をしたのかと考えさせられた。埋れ木に花が咲き、実を結ぶまで、我々青年が戦死をされた方々の分まで頑張らねばと心に決めた。それから青年団活動、農業研究会等、皆さんと力を合せて頑張った。その後の青年期は失った分も取り返すべく必死で苦しい中にも充実した日々であった。戦争中は勿論だが終戦後も物の無い、特に食糧のない苦しい時代が続いた。

もう二度とこのような心配、苦しみは味わいたくない。また子供達、いや子孫にも永久に味わせたくないと思う。このような苦しみは私達の時代でたくさんだ。永久に平和な時代が続くことを心から願う毎日である。

(三山木在住)

## 戦争を省り見て

藪内唯博（五）

「勝つて来るぞと勇ましく誓って国を出たからは……。」

と歌の文句通り、父親の赤紙通知がポストに入り、村長・区長さんを初め親戚多数の皆様の励ましで、万才、万才と送り出して頂き、その後帰らぬ人となりましたのは、私が八歳の時でした。残された私の家族は、路頭に迷った母親と私を含む四人の兄弟でした。

その後、束の間に二人の弟妹が亡くなり、母親も病弱となったので、幼少の私は親の看病と家事勉強にと努力致しました。また唯一の財としておりました、山の木材が舟の材料として強制没収となり一家破滅とな

りましたが、親戚と人々の力添えのお陰で、何とか苦境の中から終戦を迎えられました。御陰様をもちましてその後、遺族恩給、その他福祉行政の力添えを賜わり、現在の私があるのです。思い返せば艱難を振り返り、二度と残酷な戦争は繰り返すこと無く、昨年は真珠湾五十周年の年で、双方の国家も紳士の挨拶、また新春早々ブッシュ大統領を貴賓として迎えることができ、中身の話は別として、その言葉に戦った同士が、今一番の親友であると挨拶を聞いた時、私は敗戦より復活した我が日本、そしてその御恩を忘れることなく、この御言葉に酬いることを、国民各自が反省と自覚をもち、もう一度初心に返り認識し、全世界のリーダーとして両国の力で平和と民主主義の社会を心より願います。

（打田在住）

## レイテ島慰霊行

小西惣次（七四）

「昭和十九年十月二十三日、レイテ島パロの戦闘において全身砲弾瘡にて戦死」これは弟の戦死公報だった。十九年一月に比島へ現地入隊して十か月余、二十二歳だった。

二十万余の米軍がレイテ島のドラグからタクロパンの約四十キロの東海岸に上陸、パロはその中間にあってマッカーサーの上陸地点で、激戦を偲び「赤の海辺」と呼ばれていた。

いつか現地に赴き、霊を弔いたいと思っていた折、昭和五十年八月二十一日から二十八日に、京都府遺族

会青年部主催の「第二次比島慰霊団」が結成され参加させていただくことになった（レイテ島班十八名）。

マニラからレイテ島のタクロパンへ、福知山の長安寺正木上人導師が同行され、尋ねる戦跡地で塔婆を捧げ追悼読経を下され、遺族は全く感無量だった。現地住民も私たちの周りに集り、子供らには菓子などを与えると大変よろこんでいた。砲火に焼かれた海岸のヤシの木も、三十年余経った今、大きく育ち実っている。

海岸線のドラグ、パロ、タクロパンの慰霊後、海岸線から奥へ、ブラウン飛行場、ダガミ、リモン峠、カシキボット……へと慰霊。

ブラウン飛行場は高千穂空挺部隊が飛行場奪還のため降下したところで、同行の生き残られた方の話は涙なくして聞くことはできなかった。

ダガミでは、故衆議院議員玉置一徳さんが建立された合同慰霊碑の前で、合同追悼法要が厳粛に行われた。リモン峠は「死の谷」といわれ、攻防の最も激しか

ったところで、この峠だけで、二万人余の日本の将兵が戦死されたそうである。山道の斜面に赤さびた一五センチ野戦重砲が激戦を語るように残っている。

リモン峠を越えると西海岸のオルモックヘオルモックから「セブ島」にわたる、ここは天山中麓で特攻機の基地だった。小高い丘は遙かレイテ湾が遠望でき、特攻隊の将兵の雄々しくも悲しい姿が偲ばれ、ご冥福を祈っていた。

気温は四十度近くもあつたが湿度の関係か木陰ではサッーと涼しい感じがする。

昭和十三年四月、私は短期現役兵として呉海兵団に入団、五月中旬、巡洋艦「鈴谷」(長さ百九十八メートル幅二〇メートル一万二千トン艦長以下約九〇〇名)に乗艦、連合艦隊二艦隊七戦隊に属しハードな訓練を受け、志布志湾では飛行機搭乗実習で宙返り飛行に同乗し、飛行兵のきびしさを知り、潜水艦では潜行後浮上して「空気」のうまさを実感した。七月末、急遽呉に集結、弾薬、食料、燃料が補給され、高角砲高射機

銃は戦開配置について行動したこと(ソ満国境の張鼓峰事件でソ連からの空襲に備え)を思い出しながらその重巡鈴谷がミッドウェイ海戦にも残り、最後のレイテ作戦で十九年十月二十五日、今立っている目の前の海で沈んだのだ、と思いをめぐらしながら、亡くなられた幾多の英霊に只々頭がさがる思いでじつと海を眺めていた。

“砲煙に崩れしレイテの山なみも

今緑濃くしずかに語る”

“いたましき戦跡をかく尋ねれば故郷を

征でたつ姿 浮びきて悲し”

国難に殉じ、散華された英霊を偲びながら、再び悲惨な戦争がくり返されないようひたすら平和を祈っている。

(田辺在住)